

DRAMA かながわ 74

神奈川県演劇連盟事務局：神奈川県横浜須賀米が浜通1-3 Tel.045-263-4472

TAK IN KAAT



神奈川県演劇連盟プロデュース公演

「ジレンマが嗤う」

作：緑慎一郎 演出：笹浦暢大

2016年 4月21日(木)～24日(日)

平成生まれの神奈川合同公演

「アンダー・ザ・ローズ」

作：鴻上尚史 演出：大島寛史

2016年 4月28日(木)～5月1日(日)

TAK IN KAAT 2016を終えて

神奈川県演劇連盟理事長 横田和弘

2016年はこのラインナップで行われた。

「ジレンマが嗤う」は、今年で4年連続となる、緑慎一郎・笹浦暢大コンビによる作品。今年は、男の芝居(?)。ヤクザ映画ならぬ、ヤクザ芝居なるものへの挑戦か。ヤクザを親に持つ男の苦悩と、生きざまを描いた作品であった。

「アンダー・ザ・ローズ」は、新生「虹の素」を中心に、“平成生まれの神奈川合同公演”と、銘打って企画された。虹の素にしては珍しく既成の作品を脚本とした。若手が私とほぼ、同年代の鴻上作品を取り上げたことを不思議に思ったが、作品を見て納得した、現代の大きな問題「いじめ」をテーマとした作品であった。

どちらも観客席も若い世代の熱気で満ち溢れていた。両公演で2000人余りの観客動員は、最近集客に悩むことが多い中、誇れる数字に違いない。KAAT側からもこの集客数の多さに関しては、お褒めの言葉を頂いた。

両企画とも、出演者を多くしたり、ダブルキャストを組んだりの努力が実を結んだ結果であるように思わ

れる。確かに、神奈川県演劇連盟以外のキャストが多いとのこと指摘も多かったが、これは、連盟の懐の広さということなのか…。特に「平成生まれの…」は、これからの神奈川県の演劇人を育てるという意味では、その価値があったように思われる。

しかし、反面集客を気にするあまり、またKAATでの公演をハードルと感じてなのか、背伸びをしている感も否めない、背伸びをせず等身大の形での公演を…。と、KAATとの話し合いの中に出てきている。流れが変わるというよりは、原点に返って神奈川県演劇連盟の、劇団、集団の紹介とその力・面白さを紹介したいとのことである。あまり、ハードルを高く感じずに多くの劇団、集団に参加をとのことである。KAAT側の協力は惜しまないという言葉もいただいている。

来年度は、劇団四季のロングランなどKAATも新しい局面を迎えるが、TAK IN KAATの存続は、約束していただいた。

KAAT柿落とし以来、様々な神奈川県演劇連盟の公演の成果に他ならない。

力強い神奈川県演劇連盟の姿を、来年のTAK IN KAATにも期待したい。



「ジレンマが嗤う」劇評

京浜協同劇団 河村はじめ

県演連事情にウトい一演劇ファンの感想を。

脚本・緑慎一郎／演出・笹浦暢大コンビでは今回三年目というTAK IN KAA T舞台。書下し脚本とK A A T大スタジオでの公演、これだけを創造の軸足に、初顔合せの俳優陣による舞台の完成形にどうにか漕ぎつけた、というのが私の心証。演出の孤軍奮闘か、俳優達の貢献か、運命を切り開く主役になろうとしながら結局は翻弄され右往左往する登場人物たちが、群像として表現されていた。ヤクザの抗争劇。騙し騙され、疑心暗鬼が極まって最終局面へ…サスペンス劇風に加速して行く雰囲気など、同種の優れた映画のエッセンスを感じさせた。

しかしそうした演出面を「外身」とするなら、「中身」(＝物語)とそれはしっかり呼応し合っていたか。終演後にすっきり解消されない何かが残ри、芝居の中で散見された長所よりも、その事の方が気になったのは正直なところだ。新作舞台は「戯曲」が評価の中心となり、また厳しくなるのをご容赦。全体の印象だが、捨てていいものが捨てられず、矛盾しあってしまったのではないか。

主人公は古手組織・北條会の会長の息子、組織を離れて便利屋稼業を営むが、やがて抗争に飲まれてしまう。この物語に覚える最大の不足感は、この青年・大野健司の意志が見えない事だ。

冒頭、大野とその幼馴染・広瀬章人と北村春香が夕暮れのなかで言葉を交わすシーンが置かれている。広瀬が仄めかす「決別」の真意を二人は質そうとし、しかし「ただそう決めた」とだけ言う広瀬を二人は見送る。時は「現在」となり、以後時系列に話が進む。

…対立する里見組が北條会のバカ息子に路上で(計画的に)因縁をつけた事から、芝居的には抗争が開始される。

さて冒頭シーンの伏線は、終盤の抗争の修羅場で三人が対立する関係で再会することで、「運命とはままたらぬもの」的な結末を演出する。広瀬は北條会と対立する里見組直系の広瀬組組長で、北條会側とみえる大野に敵意をみせる。…ここまでは良い。ところがそこに居合わせた春香は短絡にも、最近大野に出来た恋人・早紀との間柄を妬んで大野への憎悪をたぎらせる。一方早紀は、北條会会長・渡会が登場するに及んで、形勢不利でもないのに愛する大野を見限って渡会に付く。

若干無理な展開は、ドラマ上の変化や「運命に翻弄される者たち」の描写を優先したためだろうけれど、抗争劇を俯瞰して図を描きたかったなら、このリアルで無さはキツイ。

もし主人公の人間像を描き出すドラマを狙ったのなら、無理な言動も彼の行動や態度を引き出す手段として、正当化されよう。ところが肝心の大野の内面が、いまひとつ見えないのだ。作り手としてはどちらを狙ったのか…

俳優陣は、あやめ十八番の看板女優・金子侑香やW A H A H A本舗のβ(ベータ＝芸名)ほか様々な所属が並ぶ。物語の本筋にかまないが大野を慕うオネエ役のβの演技は目を引いた。一方神奈川繋がりでは作・演出の他は、唯一の年配俳優山元洋一のみ。企画を継続する中で、俳優陣やテーマ性などの特徴が出て来れば、「ならでは」の味を醸すのではないか。その熟成の過程を見たい。



平成生まれの神奈川合同公演「アンダーザロウズ」

劇団やぶさか 池田宏治

K A A Tの大スタジオで、平成生まれの神奈川合同公演『アンダーザロウズ』を観てきました。企画団体の名称の通り、虹の素の熊手竜久馬氏と、チリアクターズの大島寛史氏を中心に、県内の若手の力で大きな舞台を作り上げようという作品。自分も若手のつもりですが、平成生まれで線引きされると弾き出されてしまうので、ちょっと悔しいです。

劇場に入ると大スタジオの奥壁一面を覆う巨大な薔薇のデザインが目に入る。チラシ等も薔薇のモチーフで統一されていて、どんな薔薇の話かと思いきや、ほとんど薔薇とは関係なく、アンダーザロウズって英語で秘密って意味なんですね。知りませんでした。劇中の薔薇の照明は綺麗でしたけど。

物語としては、いじめを受けていた同級生とそれを救えなかった主人公が久々の再開、と思いきや、実は同級生はパラレルワールドから来ているというSF的展開。



そちらの世界では主人公が同級生を救った為に逆にいじめられるも、後に復讐をして、いじめられっ子の憧れの存在になって、復讐の手助けをする団体のリーダーになっていた。勿論、復讐で全てが解決するほど簡単なものではなく…。

話が重たくなりそうな設定だが、インチキ詐欺師や、自称ヒーローなど、コミカルなキャラクター達が自由に暴れまわり、笑いをとりながらテンポよく話が展開していくので、2時間超えの長丁場ですが、最後まで楽しんで観ることが出来ました。前半のダンスも高い舞台セットの上で踊っているとカッコよさが倍増して、あそこでやれたら気持ちいだろうなあーと羨ましく思います。

平成生まれで区切るかはともかく、またこのような若手の力を集めて作り上げる企画、作品を観てみたいですし、形が変わってもまたやればいいのになあー、と思いました。



第13回 神奈川演劇博覧会

2016年3月19日(土)~21日(月)
神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

見た事のない劇団がここにはある

文：実行委員長 関口素実

第13回神奈川演劇博覧会が無事に終了した。私個人としては6年ぶりの関わりで…と書いてしまいそうだが、実際のところは事務局としての動き、現場の仕切りをしていただいた、緑慎一郎氏、笹浦暢大氏におんぶにだっこ、ほぼ動いていただいたので、ここで感謝の意を表したい。

同時に、今回出演していただいた11の団体にも、改めて感謝申し上げる次第である。というのは、募集を締め切った段階で、目標の14団体には遠く及ばない8団体という応募状況。近しい個人・団体に声をかけ(こちらこそ緑氏のご尽力!!)、理事会の協力もあり、最終的に11団体となった、というのが実際のところである。という訳で、この場に集まってくれた方々は、

大事な大事な人たちだったのです。

募集状況については思うところがあった。昔話になってしまうが、「応募団体が多く、抽選で出演団体を絞っていたということを以前に経験しているので、神奈川演劇において「演博」の価値が以前よりも高くなってしまったか?」と感じつつも、募集の段階での広報活動も不十分だったと反省したりもした(これについては後述)。

その一方で、それでも「演博」は、神奈川の演劇界の中に浸透しつつあるのではないかと感じることもあった。かつて「演博」は、

1. 旗揚げしたばかりで、単独での公演が困難な劇団の経験の場。
2. 若い劇団による新たな層へのアピールの場。
3. 県西・県央地区を拠点にしている劇団の横浜公演の場。
4. 老舗劇団の新たな試みの場として機能していたように思うが。
5. 所属の劇団ではできないことができる、新たなユニットを組んでのプロデュース公演の場。

という性格を持ち合わせるようになったか? もちろん

三回 劇博覧会 一団体



今回が初めてではないだろうし、珍しいことでも何でもないのだが、「演博」を10年以上継続してきたからこそこの小さくない結果の一つとして捉えたい。プロデュース公演の是非についての議論も存在するようだが、その議論も含めて演博が神奈川演劇を徐々に盛り上げていくのであれば、このようなスタイルも個人的には大歓迎である。

集客はまずまずではあったかもしれないが、成果についてはまだまだ出来たと思われる部分が多く残る。参加団体・観客への県演連の存在のアピール、出演団体同士の交流の演出、県演連団体及び個人への広報等々、十分に出来たとは言いがたい。中でも、外部への広報に関してはもっとするべきであった。以前に関口が担当していた時代とは、あらゆる手段が変わっており（広報そのものに関わらなくなって久しかった）、それについて誰かに相談することも怠ってしまったのだ。

演博の目的を自身なりに考え、興味を持ち、運営のために動ける（さらに、その時間もある）方が、担当者として適任であるとする。県演連はいつでも扉を開けて待っていますよ。

第十三回 神奈川 演劇 博覧会

マグ
カル

感じて下さい。
知らない芝居がある。
知らない世界がある。

2016年3月19日(土)/20日(日)/21日(月・祝)

会場：神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

主催：神奈川県演劇連盟 神奈川演劇博覧会実行委員会

共催：マグカルフェスティバル実行委員会

共催：神奈川県立青少年センター

問い合わせ：神奈川県演劇連盟 080-5659-2757

E-MAIL: info@kenenren.org

URL: http://kenenren.org

入場無料・出入り自由!

僕らの演劇

劇団やぶさか

「土竜とアポロン」 作・演出:海老原あい

2月19日～21日 於:STスポット

土 竜。もぐらです。

そういえばもぐらを実際に今まで見た事がない。土の中で暮らしている。目が退化している。毛が生えていた。もぐらってそもそもかわいいのか？ミミズとか食べるのかな？と、いろいろと観劇する前から思い



を巡らすが実際のもぐらを見ていなくても「土竜とアポロン」に全く影響はしない。劇団やぶさかに登場する様々な動物はとても華やかでかわいいのです。

小さい舞台を所狭しと多くのキャストが綺麗な衣装に身を包み時には面白く、時には踊り狂い、物語を盛り上げてくれる。

土竜のヨウは地上を目指す。地下世界で虐げられている土竜。フロアを隔てて存在する差別。そう、それは階層は階級を表している。上に存在する高貴な生活。下に存在する下賤な香り。その壁を越える事は御法度であり、上から下を見下ろす事は出来ても下から上を見上げるには大きな壁が存在する。その壁を越えるには何が必要なのか。

それは、友情であり愛である。性別、種族を越えた仲間がこの壁を越えさせてくれる。上を目指したい。外を目指したい。新しい物(世界)を見てみたい。その願望は子供の頃に読んだ冒険小説の興奮を思い出させてくれる。何も汚れていない真白な心はいくつになっても心を打たれる。心から頑張れと客席の一同が願う、その思いは物語のラストへと加速していく。

土竜が目指した地上。太陽。見てはいけないもの。やってはいけないこと。それでも触れたい、知りたいと駆け上ってきた。土竜の行動はアポロン(太陽神)の怒りに触れたのか。はたまた、迎え入れてくれたのか。僕は静かに涙する。

演劇プロデュース『螺旋階段』緑慎一郎

まりこ☆みゅーじあむ

「戦争童話」野坂昭如作品～戦争童話集より～

作:野坂昭如 演出:川井真理子 2月20日 於:宗興寺

表 記のチラシに誘われて会場の宗興寺を訪ねた。地域に解放されているという雰囲気の良い小さな部

屋に9個の長テーブルとそれぞれに3個の椅子が用意されていた。最大27席の観客席である。お茶とお菓子も用意され、くつろぎの空間で聞いてほしい、終演後も残って交流してほしいというのが主催者のこの集いの目標の一つでもあるようだった。



私は終演後の交流会には参加できなかったもので、そこでどんな話がされたかは知らない。終演後の交流もこの集いの一環だとすると企画の半分にはしか参加できなかったことになるが、たいていの場合交流会はおまけだろうからご容赦願いたい。

小さい潜水艦をクジラ仲間と間違えて恋したために、潜水艦と間違えられて攻撃されバラバラに吹き飛ばされたクジラの話、戦場の馬係の兵士が爆撃された後に生き残った馬を追い、やがて馬が死ぬと自分が脱走兵になってしまったと思い込み、終戦も知らずに自死する話、空爆で逃げ場を失った母親が必死にわが子を守ろうとするが、やがて干からび風になって舞っていく話、そして、終戦近くドイツ人から買ったバームクーヘンの最後のかけらを宝物にしていた子供が、それを木の実のように土に埋め水をかけると芽が出てやがて木になりお菓子の木になった話、野坂昭如の戦争童話4本はどれも心に残る名作でした。

朗読というのは作者の描いた世界に朗読者の表現が加わり、本を読むこととは違う新しい言葉の劇世界を生み出し、それを聴衆の心に届ける作業だと思うのですが、私の感想を率直に言えば、一部を除いてそういう表現にはなっていなかったなあと思います。朗読会の主な目的が戦争童話を知ってほしいということであれば、20人ほどの参加者に知っていただけたことで目的達成になるでしょうが、言葉による劇的世界を通してより豊かに野坂昭如の世界を届けたかというそうはなっていなかったという残念さが残ります。

ずっと同じ調子でただ読み続けるだけでは劇世界を届ける表現とは言えないし、本を見て読んでのに言葉に詰まったり、ここは一息で話してほしいと思うくどりがとぎれとぎれにつかえたりというのは、勉強会の枠を超えてチラシをまき一般の人にまみえる公演としてはもう一工夫してほしいと思うところです。交流会なしでも豊かになった気持ちで会場を後にできる舞台を期待します。

山本 忠利

劇団河童座

「狐とぶどう」 作:ギリエルメ・フィゲイレド 演出:横田和弘

5月14日・15日/21日・22日

於:神奈川県立青少年センター多目的プラザ/横須賀市立青少年会館

舞 台は古代ギリシャ。

哲学者のクサントスが、イソップを奴隷として連れてくる。このイソップは「ぶおとこ」だが、動物や虫を主人公にした寓話の中に、人間の尊厳や生きる意味を織り交ぜた面白い例え話を次々と話していく。クサントスは、その例え話を我が物にして、富と名声を得ようとする。そして、クサントスの妻クレイアは、イソップに徐々に惹かれはじめ、奴隷のメリタはクサントスを愛し、と、メインの4人の中に複雑な人間関係が渦巻く。

まず、馴染みのないこのような古典の脚本に取り組み、たことに敬意を表したい。時代背景も勉強しなくてはいいないだろうし、セリフ量も多く、かなり言いにくいと思う。照明・音響・舞台装置などに頼らずに仕上げていて、ごまかしがきかない作品だ。

ただ、奴隷制度は、理解しづらい。女性の奴隷であるメリタが「ここで働けて幸せ」と言い、主人たちと対等に接していたので、「奴隷」というと、苦しい仕事を無理やりさせられている、というイメージは偏見だったのかしら、と思う。ずっと立っているだけで最後にイソップに鞭をあてるエチオピア人の存在も謎だった。



イソップはひたすら「自由」を求め続けるが、単に奴隷でなくなれば幸せ、というものでもないらしい。今の私達にも、何が「自由」なのかを考えさせられる。言葉を生み出す人間の舌は、争いの原因にも、和解の力にもなり、悪事の素にも、正義の武器にもなる、というようなセリフが印象的。タイトルの「狐とぶどう」はイソップの寓話で、自分が欲するものが努力しても手が届かない場合、自分のいいように理由をつけて納得しようとする、ということを表している。

古典作品には、何かしら現代に通じるものがある。この作品も根底の「自由と尊厳」はもちろん、格差社会や家族の問題など、考えさせられるところがたくさんある。気になったのは、クサントスだけがコメディタッチの芝居に見えて、彼の野望や苦悩が薄まってしまったように思えた点。

イソップは「ぶおとこ」の設定なのに、藤原竜也みたい、と思ってしまったのは、イソップ役の中西君が「ぶおとこ」では無さ過ぎたので仕方がないか…。しかし、彼の独特な視線や動き、切り替えは面白かった。前回は脚本も書いていたし、これからはマルチな活躍を期待する。舞台装置は、多目的プラザに元々ある柱を白く囲み、更にもう一本、照明を仕込んだ白い柱を立て、ギリシャ建築の雰囲気が出ていたのに、椅子やテーブルなどの家具が手作り感満載だったので、いっそ抽象的な箱のようなものの方が良かったのではないかなと思った。

岡本みゆき

横浜小劇場

「あの日あの雨」

作:村井志摩子 演出:おかざきたえこ

5月21日 於:山手ゲート座

今 年も「ノールトフー
ク・ヘフト」が明治

3年に建てたとされる

「ゲート座」(勿論当時の建物ではない)でヘフト祭が催され、毎年協力参加されている横浜小劇場の朗読



劇「あの日、あの雨」を観劇しました。1986年4月26日チェルノブイリ原発事故で、風に乗って放射性物質が首都モスクワへ運ばれるのを減らそうと、白ロシア共和国ミンスク上空でヨウ化銀の粉を撒き人工的に雨を降らせた「白い雨」!! 1945年8月6日広島原爆投下後に降った「黒い雨」!! とを繋ぐ物語。

ミンスクの被爆少女ラリサと日本の被爆二世春子がプラハの新聞記者コベッキーを介してピアノというキーワードが縁で結びつき、被爆者の母、夏子と共にミンスクの被爆した子供達を精神養子として医療の援助をする事に目覚める迄の過程を、作者の深い視点と強い反原発の思いが貫かれた筆致で書かれた朗読劇です。

何故プラハが舞台か? それは1915年プラハの美術専門学校で勉強した、建築技師ヤン・レツルが広島に建てた産業物産陳列館、五千度の閃光、音速の二倍という衝撃にもかかわらず、爆圧が垂直だったために倒壊しなかった、原爆遺産「原爆ドーム」があるからに他ならなかったのだと思いました。後の知識で恥ずかしい次第です! 作者村井志摩子さんの「世界に四百を超える原子炉の運転をなんとかして止めねばならぬ!」の強い思いは、福島原発事故を経験した現在の日本のなんと26年も前に警告されていたのです。自分の身に降りかからなければ理解できない人間とは何と先を見る目、思慮がないのでしょうか。(勿論自戒です)

5分遅刻して劇場に入った途端、心臓が止まりそうになる程ビクりました。なんと先日訃報を知らされたばかりの岡崎多延子さんが舞台上に立っているではないですか? そんなはずは無い! もしかして岡崎さんの妹さん? 後に関係者が教えてくれました。以前横浜小劇場の女優さんだった関純子さんとおっしゃる方だそうでした。それにしても遠目にはそっくりだったのです。井上演出は朗読劇といえども、語り手を動かし、音楽も入れて芝居風に創ってました。主宰の荒井さんが、「朗読劇団」と呼称されたくない、と仰っている旨伺いましたが、エネルギーもお金もかかる芝居に固執しなくても、無理なく今できるスタンスで頑張れば良いのではないのでしょうか! 朗読劇だって充分感動できるのでですから、何より神奈川アマチュア演劇の原点である、横浜小劇場が消滅しては困ります!

よこはま壱座 勝碯若子

劇団かに座

「お茶をすすって」

作:ふたくちつよし 演出:馬場秀彦

6月17日～19日 於:かなつくホール

まずは劇団創立65周年おめでとうございます。体調を崩しながらもかに座に全身全霊を注がれ続ける田辺代表には熱く敬意を表すばかりです。



この「お茶をすすって」

は1960年…昭和35年が舞台とのこと。私が生まれる前の時代ですが、なぜか懐かしい思いでいっぱいになりました。舞台上で繰り広げられる日常が、おそらく観客の皆さんにもそれぞれの思い出の引出しに詰まっている光景だったのではないのでしょうか。

晩のおかずやら、採れたての野菜が届いたり届けたり、あけっぴろげの縁側で居眠りする祖父母の日向ぼっこ、隣のおじさんが10時になるとお茶を飲みに来る、学級連絡網の電話だよーと呼びに来る本家のおばちゃん…そんな懐かしい昔が蘇って重なるシーンが満載の舞台でした。

姉に恋人ができ、家族に紹介するために彼がやってくる日の家族の緊張。初めて訪れた恋人の家での彼氏のド緊張も、当時はきっとこんな感じだったのだろうと微笑ましく、けして派手なストーリーはないものの、ほのぼのとした優しさに溢れた舞台は、とても心地よい時間でした。

「家族」といえば、この倉本一家のように（今回祖母はいなかったが）おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、大勢の兄弟というのがかつての日本で、今の家族といえば「核家族」です。「娘さんと結婚を前提に…」なんて親に報告に行くなんて聞かなくなりました。

今、デジタルなものが増え、隣近所との関係が希薄となり、下手をするとご近所トラブルすら多くなった時代だからこそ、かつての日本の家族の風景を思い出してみることが必要なのかもしれません。ぼんやり昭和の走馬燈を眺めるような、そんな芝居も面白いものですね。

「いちじくの花は、実の中で咲いて熟してゆく…そう、家族みたいなものさ」という今作の伝える「家族」の姿は、お茶でもすすりながらのんびり観たい…そんな和やかな劇団かに座の「お茶をすすって」でした。

劇団こゆるぎ座 保乃しんり

演劇プロデュース『螺旋階段』

「ぐるぐる回る地球に乗って」

脚本・演出:緑慎一郎

6月25日～26日 於:神奈川県立青少年センター多目的プラザ

難しい事を考えず、気軽に
見る事の出来る作りのお
芝居でした。



仕事上のミスで上司にきつい嫌味を言われる勝。落ち込んでいる時、駅のホームで「あなたは宇宙人ですか？」と可愛い女の子から声を掛けられる。この女の子、実は救世主を探しに地球にやって来た宇宙人の内の1人だ。「怪しい新興宗教か？」と疑いつつも勢いに押し切られ、彼女の仲間達が待つ場所へ付いて行く勝。ここで黒パネルだけを並べたセットから、パネルが開かれ宇宙船の中へと変化する。「ちょっと空間が寂しいなあ」と思っていただけに、見た目全体が変化する効果は大きい。

どうやって彼女は勝を「宇宙人」と判断したのか？それは「顔」だ。流石に「それは無理だろう～」と思ったが、下地役の俳優が宇宙人と間違われた時「うん、有りかもね」と妙に納得する。彼を活かす為の設定だったのかも知れない。下地の顔をはめ込んだ合成写真もお遊びで出て来るのだが、本人には知らされていなかったのだろう。「聞かないよー」の空気が広がる。作品にとってそれが良かったかどうかは分からないが、作り物ではない「瞬間」が見られたからだろう。客席からは笑が起こっていた。

この作品は「宇宙人」と言う全く別の価値観を持ち込む事によって、気軽に笑える土壌を作りながら、どこか現代社会への風刺を含んでいると思う。宇宙人にすらアルバイトをさせてみたり、綺麗事にしかならない理想論を「普通の事」として言わせたり、ほとんど価値が無いモノが別の所ではとても貴重だったり。

途中ドタバタを挟みながら、最後は勝の発注ミスで出た多量の鉄製品が、彼女達の星を救うエネルギーとして渡される所で話は終わる。高いテンションで何度も繰り返される同じシーン。アニメの一場面を彷彿とさせるギャグ。1つの方向性に振り切ったキャラクターや、誰もがイメージできる古典的キャラクター。身体的特徴のいじりや、俳優の即興部分が有るであろう空気感。それらのツールを使って「先ず笑ってもらおう」と言う気持ちが強く見える舞台でした。

studio salt 東享司

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』ム ● ガムシャリズム ● 京浜協同劇団 ● 劇団蒼い群 ● 劇団河童座 ● 劇団かに座 ● 劇団川崎演劇塾 ● 劇団こゆるぎ座 ● 劇団スタジオソルト ● 劇団やぶさか ● 劇団よこはま壱座 ● ナオサク企画 ● 虹の素 ● まりこ☆みゅーじあむ ● ミュージカルプロジェクト ● ヨコスカ・ベアフットシアター ● 横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>